

4、ワクチンの副反応について

(ワクチンの副反応発生数について)

続きまして、ワクチンの副反応について伺います。

ヒトパピローマウイルスワクチンの副反応はどのようなものがあるのでしょうか。特に重篤な事例としてどのようなものが報告されていますか。また、副反応及び重篤な副反応の発生件数、そして10万人当たりの副反応発生数をお教えてください。

安井修福祉保健部長

子宮頸がん予防ワクチンの副反応についてでございますが、かゆみ、接種部位の痛み、腫れ、胃腸の症状、失神等が上げられております。また、重篤な事例といたしまして、全身の震え、それから異常行動等が報告されています。

次に、副反応及び重篤な副反応の発生件数についてでございますが、厚生科学審議会の専門部会の報告によりますと、子宮頸がん予防ワクチンが平成21年12月に発売されてから平成25年(2013年)3月末までに約865万回接種され、そのうち1,968人の副反応の報告があり、接種者10万人当たりの発生率は22.8で、そのうち重篤な副反応の発生率は10.2人とのことでございます。

この副反応とワクチンとの因果関係につきましては、現在、同審議会において調査が開始されていると聞いております。

以上でございます。

(ワクチンの副反応について)

ありがとうございます。

今、御報告いただいた副反応については、市のほうから中学1年生にお配りしております予診票のほうにも記載されております。

ただ、予防接種法施行規則を読ませていただくと、ヒトパピローマウイルス感染症の副反応として可能性が上げられているのが、アナフィラキシーですね。それから血管迷走神経反射とかは、恐らく今、上げていただいた部分に入ると思うんです。ただ、そのほかにも上げておられまして、急性散在性脳脊髄炎でありますとか、手足のすごく障がいになるギラン・バレー症候群でございますとか、あとは血小板減少性紫斑病といいまして、血小板が非常に減って出血しやすい病気になるんですけども、という非常に後遺症の残る副反応もあるわけです。

そして、先日、同僚議員からも御質問ございましたとおり、やはり日本でもそういった副反応が起こっております、すごく苦しんでおられる方がおられ

ると。

それで、その副反応についてなんですけれども、発生率が、理事者の答弁では先ほど10万人当たり、発生率22.8人と。そのうち重篤な副反応の発生率は10.2ということだったんですけれども、私がお配りさせていただきました資料では、10万人当たりの発生者数、副反応自体は66名、そのうち重篤な副反応は30名となっております。

これはどういうことかと申しますと、下に添付してありますとおり、資料は同じです。それで、冒頭申し上げましたとおり、このワクチン、実は3度打たなければなりません。厚労省の報告書の計算によりますと、およそ平均接種回数を2.7回と仮定した場合、258万人、福祉保健部長が答弁されたものと違うかなと思うんですけれども、母数を割る2.7にした場合、単純計算して、10万人当たりの発生者数は66名になるわけです。

もう一度先ほどの議論を思い出していただきたいんですけれども、そもそも子宮頸がんワクチンの目的、効果を生ずるものというのは、10万人当たり7人の子宮頸がんを防止するといえますか、罹患を防止するものでした。そしてまた、子宮頸がん自体も、進行が非常に遅くて、検診を適切に行えば、防止することができるんです。そして、この子宮頸がんワクチンはホームページにも書いてありますけれども、これを受けたとしても、検診は受けてくださいということを書いているんですよ。受けようが、受けまいが、検診を受けて見つけば、必ず防げるものなんです。

それで、10万人に7人の子宮頸がんの罹患を防止するために、10万人に66名もの副反応を生み出して、特に重篤なものを30名も生み出します。これは、ワクチンとしてどうなのかなという議論があると思うんです。まず、この情報を頭に入れていただいた中で、ここからが、我が市としてどう対応するのかというのをぜひ伺いたいと思います。本当に福祉保健部長、たび重なる質問に答えていただきまして、ありがとうございました。